



部落に生まれたからこそ見えてきたことがたくさんあると語る松村さん

あした元気になあれ

反差別・人権研究所みえ 松村智広

部落差別のワナ

私は三重県の被差別部落に生まれた。6才で母を亡くし、父親と祖母に育てられた。だから年に一度やってくる「母の日」は大嫌いだ。みんなは赤いカーネーションなのに、私だけが胸に白いカーネーションを付けられたからだ。参観日もイヤだった。来ている人のほとんど全員が母親で、私は祖母だっ

「今日は、私のプライベートと引き替えに、みなさんの理解が欲しい。」と語りはじめた松村智広さん。旗開きの記念講演では、自身の生い立ちと被差別体験を明るく、ユーモアたっぷりに語って頂きました。以下、講演の一部を紹介致します。(文責・編集部)

差別する人こそ恥ずかしい
今でも厳しい結婚差別の現実はある。結婚を反対され断念するときに2つの理由があげられることが多い。「私は良くも生まれたいけど、子どもがかわいそうだから」「私はいいけど、もに「私はいいけど」がついている。「私がよかったら、そ

れでいいじゃないか。本当は「私が」イヤなんだろう。世間に責任をなすりつけるのはずいぶんひきょうだ。世間って誰？封筒に切手を貼って世間に手紙を出したら、自分に返ってくる。つまり、世間は自分だ。自分が変わらなければ、世間は変わらない。「生まれたいけど、子どもがかわいそう」に對して、はじめか

ら「かわいそう」と決めつけるのは、命に対する侮辱である。「かわいそう」なのでなく、差別をする子どもが「かわいそう」なのである。人を差別してしか生きられないのなら、その生き方こそ、かわいそうだ。一日も早く本当の意味での人間にもどしてやるべきだ。部落に生まれたことが悪いわけではない。

差別をする人が悪いし、恥ずかしいのだ。人権問題を考えるというのには、人のためにするものじゃない。自分のためにするもの。これが本気になったとき、人のためになる。部落解放は人間解放。目に見えない鎖から自らを解放し、当たり前を当たり前に戻す作業。部落差別って、闘わないと見えてこない。闘わないとなくせない。

たから。祖母の気持ちも分からず「帰れ」と学校の玄関で追い返したこともあった。母と死別して33年目、父は60才の誕生日を待つようにして母のもとへ旅だった。生活がきつい、仕事もきつい、差別がきつい、きついづくしの毎日の中で、父は寂しさをまぎらわすかのように、時には、自分自身を痛めつけるかのように酒を飲んでた。そんな父が肝臓を壊して入院したとき、

病院では自分の住んでいるところを隠し、読めないはずの新聞をとっていた。「病氣も貧乏も我慢できる。でもな、差別は我慢できないのや。」と、最後まで、父は堂々とふるさとを名乗ることはなかった。人は「胸を張れ」とよく言うけれど、

ばあちゃんこそ本物の教育者
徳島の中学校で識字字級に通う祖母の話をしたら、勉強が苦手なゆかちゃんから「かわいそう」と決めつけるのは、命に対する侮辱である。

胸を張れなくさせているものがある。差別により貧乏で学校に行けず、教育を奪われた父親のことを、何も分かんずに責め続けた自分。部落に生まれた自分が差別が一番見えないはずなのに、その自分が、部落差別の餌にはまり、親を憎んで、ふるさとを恨んで、自分自身をも否定して生きてきた。差別をされてきた悔しさよりも、差別を許してきたことの方がもっと悔しかった。



熱気あふれる会場

胸を張れなくさせているものがある。差別により貧乏で学校に行けず、教育を奪われた父親のことを、何も分かんずに責め続けた自分。部落に生まれた自分が差別が一番見えないはずなのに、その自分が、部落差別の餌にはまり、親を憎んで、ふるさとを恨んで、自分自身をも否定して生きてきた。差別をされてきた悔しさよりも、差別を許してきたことの方がもっと悔しかった。

差別によつて奪われた文字を奪い返している祖母の姿に、勉強から逃げずに自分の夢である保育士になるために頑張っているという内容の手紙だった。震える手で鉛筆を握り、手あかと涙でつぶられた手紙の文通が始まり、ゆかちゃんはそのぼんんの全国大会で2位に、ついには高校を合格した。その手紙を見た祖母は「よかった。よかった」と、涙を流し心から喜んでた。文字を持たないばあちゃんが、ゆかちゃんに「元気」と「やる気」を与えた。ばあちゃんのほうこそ本物の教育者や。

山口県東部地区部落問題研究会 第18回講座(ご案内)

日時 2月27日(金) 13:30~
場所 シンフォニア岩国
岩国市三笠町1-1 TEL0827-29-1600
①講演 部落の歴史像~その捉え直しと論点~
東日本部落解放研究所事務局長 藤沢靖介
②コンサート なかよくしよう
シンガーソングライター 季陽雨
お問い合わせ 同実行委員会 TEL0827-24-4575

第23回人権啓発研究集会

日時 2月12(木)、13(金)
会場 滋賀県立文化産業交流会館 他
2月12日(木) 全体会
①講演 「格差社会と人権」 森永卓郎(獨協大学)
「滋賀県における差別事件」 丸本千悟(部落解放同盟滋賀県連)
②報告 「東近江市民による同和地区間、合わせ差別事件」 宇野一雄(愛宕町副町長)
「東近江市民による同和地区間、合わせ差別事件の課題と解決に向けて」
パネル パネリスト 北口末広(大阪府連委員長)、宇野一雄(愛宕町副町長)
建部五郎(滋賀県連委員長)、富田多恵子(滋賀県同推協会長)
コーディネーター 奥田均(近畿大学)
2月13日(金) 分科会(第2日目)
第1分科会 「入門講座I」
第2分科会 「入門講座II」
第3分科会 「企業と人権」
第4分科会 「あいつが差別事件から学ぶ」
第5分科会 「視聴覚教材を活用した人権啓発の実践」
第6分科会 「全国の人権啓発センターの取り組み」
第7分科会 「意識調査を踏まえた今後の啓発活動と同和行政」